



随筆

イラクを訪ねて (5)

塙 輝 雄*

5.2 ハトラ

モースルに着いた日、街角で話しかけて来た学生は“ここまで来たからにはバダールを見ないで帰るべきではない”と熱心にすすめた。その時はバダールがいかなる場所であるか全く判らなかつた。その日の夕方ムハマ・ゼキ博士は“明日は休みであるからハトラの見物に行こう”と誘ってくれた。二つの地名は似ているように思われたので聞いてみると、やはり同じ場所であった。ハトラは古い名称でバダールは現代名、(アラビア語)というわけであった。イラクでは地名はアラビア語で呼ばれるのが普通であるから、私共が古代史で覚えた地名とすぐ結びつかない場合の方がむしろ多い。例えば、ウルクはワルカ、エリドゥーはアブーシャハラインといった具合である。

ハトラはモースルの南南西約90kmの地点にあり、車で1時間半の行程(約110km)である。私共は大学の公用車で案内されたが、個人的な旅行ではタクシーを雇う以外に行く方法は無い。市の南部も北部と同様、なだらかな丘の連なりとなっている。しかしすぐ単調な半砂漠的平原となる。道はティグリス右岸を南下してバグダードに至る幹線となって居り、車の往来はかなり多かつた。道路の両側には貧弱な麦の育った畝が続き、所々に日干し煉瓦製の農家や遊牧民のテントが見られた。また道路から飛び出して壊れている自動車も稀ではなかつた。ムハマ・ゼキ博士によれば、この地域の地下水位は高く、4mも掘れば水が得られるが塩分を含むので飲むことは出来ない。しかし地上に散在する池の中には飲料に供し得るものもあり、水汲みは住民の欠かせない日課となっている、との

ことであつた。実際、ロバの背にブリキ製の水カンを振分けに積んで炎天下を曳いて行く人達を何度となく見掛けた。時々道路を横断する羊の群のため停止させられながらも80kmを1時間で走り、ハトラ27kmと書かれた標識を右折すると石灰岩地帯となつた。低い丘の間を縫って約30分走ると忽然として巨大な建造物が現われた。これが、1951年以来発掘と復元工事がイラク政府の手によってなされて来たハトラの大神殿なのである。

ハトラはメソポタミアとシリア、小アジアとを結ぶ隊商路を扼する地を占めていた上、イラン系のパルティア王国のローマに対する防衛の拠点ともなつていたので、前二世紀から後3世紀にかけて大いに栄えた。住民は殆んどアラブ人で、パルティア王国から自治を獲得してアラブ王国を建て、ここを首都としていたのである。市はほぼ円形の二重の防壁で守られ、外壁は全長8kmの盛土、内壁は外壁から500m内側に二重の切石積で作られていた。内壁には東西南北四カ所に巾約4mの門と約160の櫓があり、外壁との間には巾20~30mの堀がめぐらされていたが、今はすべて崩れ果てている。この強固な防壁と勇猛な住民はよく2度にわたるローマ軍の包圍攻撃を撃退して歴史にハトラの名を止めたのであつたが、AD270年にササン朝ペルシャによって亡ぼされ、徹底的な破壊によって砂漠の中に打捨てられてしまつたのである。

復元された大きな城門の前で車を降りたが、これは市の中心にある南北320m、東西450mの壁で区切られた聖域の東門であつた。巨大なアーチ型の開口をもつ大神殿に惹きよせられるように歩いて行くと約300mで小型のギリシャ神殿に達したが、これは稚拙な模造品といった感じであつた。この神殿の裏にはまた南北に走る

*塙 輝雄 (Teruo HANAWA), 大阪大学工学部, 電子ビーム研究施設, 教授, 理学

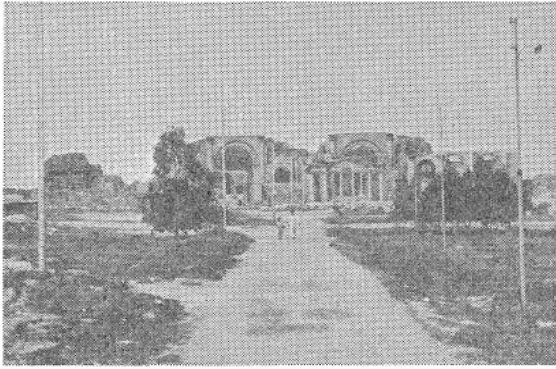


写真1 ハトラの神殿

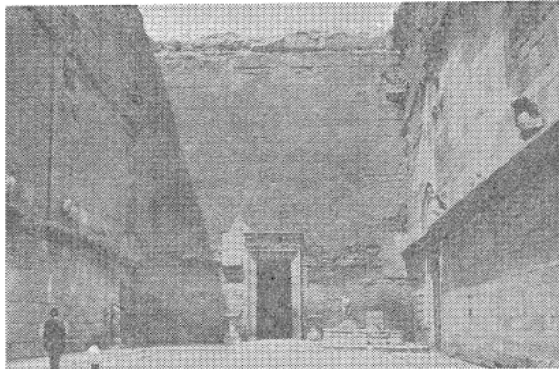


写真2 ハトラの神殿，南のイーワン，中央の入口奥にシャマシュの神殿がある。

壁があり，門をくぐって南のイーワンと呼ばれる大ホールに直面したのである（イーワンとは一端に大きな開口部をもつパルティア風のホールのこと）。大神殿は石灰岩の切石を広い面と狭い面を交互に積み上げて作られて居り，天井はヴォールトとなっていた形跡がある（この切石積の方式は他の建築や城壁に至るまで採用されている）。イーワン内部は巾15m，奥行30m，壁面の高さ15m程の大きな空間となって居り，写真に見られるように壁の中，上段には多くの，多分魔除けと思われる彫刻が取付けられ奥には祭壇が設けられている。ヨーロッパで，もっと大きなドームの幾つかを見物したことはあるが，この異教の神殿程，不思議な感銘を与えたものはなかった。かってヴォールトがホールを覆い，巨大な開口部が木製の扉で閉められていた時，薄明の中でいかなる儀式が行われたのであろうか。

南北二つのイーワンはそれぞれ両側に二階建の副棟を有し奥の入口から入ることが出来る。その一部には石像が数多く陳列されていたが，

首のないものもかなりあった。これらは完全に埋没していなかったためイスラム教徒によって破壊されたものであろう。南のイーワンの奥には側廊をめぐる正方形のホールがあり，太陽神シャマシュの神殿とされている。この建物の側面にはかなり急な狭い石の階段があり，屋上に登ることが出来た。イーワンの最上部に立って見渡せば小砂丘が地平線の彼方まで続き，まるで砂の波が打寄せてくるような感じであった。ガイドも説明も無いまま歩き回っているうち，とある小室に迷い込んだ。部屋の中央には座敷机位の平な石が置かれ，すぐ近くに井戸があった。また壁面に沿って多数のカマドが設けられて居り，古代の台所であったことは疑いなかった。井戸には水は無かったが地面は水分が多らしく，雑草がかなり生えていた。とりわけ印象的であったのは暗い井戸の縁に二，三輪の真紅のケシの花が咲いていたことであった。それは浮び上った古代生活の幻を一瞬にして消し去ってしまったのである。

強い日差しの下で，アッシリア，バビロン，ギリシャ，ローマ，パルティア等の文明が稚拙な感じで混在しつつも，イスラム建築の原形らしさをも示しているこの興味深い遺跡を見回っている間に猛烈にノドの渇きを覚えた。いつの間にか2時間余り経ってしまったのだ。車に再び乗り，近くにある国営レストハウスに行った。何か飲もうとしたらジュース類も水もお茶もすべて無かった。しばらく前にバスで到着した，団体観光客が，あらゆる飲物も，料理も消費つくして立去った後だったのである。私共以外にもう一組の団体客が居たが全員飲物にも食物にもありつけず，ゲッソリしてロビーに座り込んでしまった。その中，一人の男がどこからか薄茶色に濁った水をガラスの水差しに汲んで来た。2～30人が1つのコップでこの水を回し飲みしたのであるが，私も衛生よりも渇きを癒す方を選んだ。かって，古代の大都市を支えた水も得られなくなり今ではタンクローリーで運んで来た水を貯えて使っているのである。

耐りかねたムハマゼキ博士は連れて来た4歳になるアーラという娘を私に預けて運転手と共に近くの村まで飲物と食料を探しに出掛けた。

30分以内に戻るといっていたがなかなか帰って来ず、疲れていつしか眠り込んでしまった。突然、アールが泣き出し炎天下を砂漠の中にかげ出してしまった。やっと連れ戻したが泣き止まず、何度も外へ走り出すのでまことに閉口した。40分以上経って二人は手ブラで帰って来た。仕方がない、ガマンしてモースルまで戻ろうと話していると突然、食事の用意が出来たと係員から知らされた。食堂でスープにノドをうるおし、ピラフを食べて、やっと生き返った思いをした。計らずも沙漠の旅、いやイラクの旅といった方が良いかも知れない、の困難さを垣間見たのであった。現地の人ですらこのような成り行きは予想し得なかった位であるから、私共が一人旅をする場合の困難さは想像外であろう。あとで、JICAの人の語ったところによれば“一人でイラクを旅行出来る人は、どんな国へ出掛けても心配ない”のだそうである。

5. 3 アカルクフ

バグダードの西約20km、幹線道路からわずかに外れた半砂漠にピラミッドのような建造物が聳えている。これが前15世紀から約400年間バビロニアを支配したカシート王朝の主都、ドゥル・カリガリズ（ドゥルは都、カリガリズはカシート王朝の創始者の名、現在はアカルクフと呼ばれている）のジグラット（塔状の神殿）なのである。これは現存する古代のジグラットの中、恐らく最大と思われるもので、底辺は69×67m、高さは57mもある日乾し煉瓦の塔である。写真に見られる塔の下部はイラク考古局の手によって焼成煉瓦を積み上げて復元されたものであるが、“傾斜角を間違えて作ってしまったのだ”と云う向きもあった。塔には無数の横縞が見えるが、これは葦を編んで作られたムシロである。近づいて、このムシロに手を触れて見ると硬く、弾力があり、なお色彩には鮮かさが残って居り、3000年以上昔のものとは思えない程であった。日乾し煉瓦は、泥しか無いメソポタミアにおける唯一の建築資材で、草を練り込んだ粘土を型に入れて乾し上げたもので思いがけない強さを秘めていた。しかし、高い建造物を積み上げる場合、何段毎かに葦のムシロを狭んで水準の調整と、荷重の均等化を計る必要

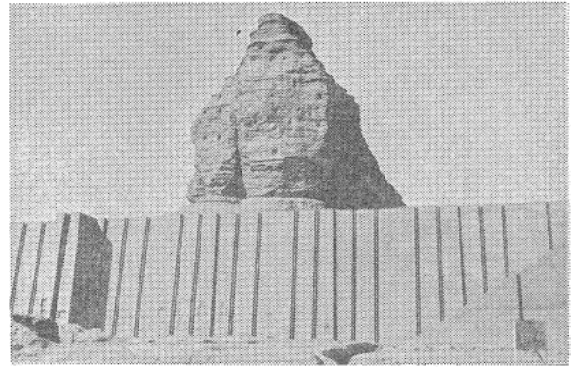


写真3 アカルクフのジグラット

があったのであろう。この塔は7段毎に規則正しくムシロが狭まれている。塔の上部には無数の小穴があり、鳥の巣穴となっている。巣穴を出入し群をなして飛び交うコバルト色の美しい鳥を見上げながら、確実に崩れて行くこの泥の塔を守ることが出来るのだろうか一瞬考えた。しかし、成り行きにまかせる以外にすべは無きそうである。

5. 4 クテシフォン（サルマンパック）

バグダードから東南に伸びる国道を約35km走ると、ティグリス左岸に広がるサルマン・パックと呼ばれる公園に到着する。ここは良く整備された遊園地で、ラクダ乗りが出来る広場、地面に敷かれたジュータンに坐ってコーヒーを飲み、アラブの侍統音楽やショーを楽しむことの出来る遊牧民の大テント、畜力灌漑装置の寸寸模型、売店小屋等があり、多くのピクニック客を集めている。

勿論、私共にとって興味を惹くのはこれらの施設ではなく、高さ37m、巾25.5m奥行きも巾と同程度（数値はイラクの資料による。奥行きは記載されていないので推定）の焼成煉瓦製の巨大なヴォールトである。

この地は本来クテシフォンと呼ばれ、ササン朝ペルシャ（277—651AD）の首都となっていた所で、大ヴォールトを中心とする建造物はサーポール一世が3世紀半ばに作り、6世紀、ササン朝全盛期にホースロー一世が手を加えた宮殿なのである。写真でアーチの左側に見える建物は、一枚の厚い煉瓦の壁であって後には何も残っていない。同じものが右側にもあったが1887年、ティグリスの大洪水で倒潰してしまった。さてこの世界最大の煉瓦のアーチを近くか



写真4 サルマンパック公園内、クテシフォンの宮殿

ら見ることにしよう。下方約 $\frac{2}{3}$ の厚い壁は煉瓦を平積みにしたものであるが、その上 $\frac{1}{3}$ のアーチ型の部分は積み方が異なり平の面が正面に向いている。一体いかなる工法で、どんなモルタルを用いて、この巨大で、優美なアーチを作らせたのであろうか。ササン朝が亡び1300年経った今、内外共に灰色の粗野な煉瓦の面を露出しているに過ぎないこの建物は、その昔、詩人達が燃え上るような称讃の言葉を惜しみなく捧げたと伝えられている。恐らくストッコで輝くように美しく塗り上げられた壁には数知れぬ宝石がちりばめられ、金、銀で飾られ、この世のものとも思えぬ雰囲気をかもし出していたのであろう。私共は正倉院に残るわずかな伝来物からササン朝ペルシャの優美さを知ることは出来ても、豪華な巨大さといった側面はとも想像出来ない。確かに、豪華な巨大さこそ王の神権の象徴であり、これ無しでは王座の安泰はあり得なかったのであろう。私共は現在、甚だ合理的に作られた小空間に生活しているが、たまには巨大空間の影響力を受ける必要があるのではないだろうか。

5.5 バビロン

バグダードを出て単調な乾いた平原の道を約90km南下すると、突然右手に高い砂丘の連なりが現われる。始めは見過ごしたが、これはバビロンの内壁の跡らしい。やや走って標識に従って右折すれば約1kmでバビロンの遺跡に到着する。途中右手に、バビロンのイメージにそぐわない円型のギリシャ劇場が建っている。これは最後にバビロンを復興せんとしたアレクサンダー大王の遺した建物で、イラク政府が復元した

ものである。遺跡の入口にはイシュタル門を模した青色の門が建って居り、抜けるとすぐ右側にレストハウスと博物館がある。そこを過ぎて提防の土手に昇るように巾広い階段を上がると、緑濃いナツメ椰子の林を背景として、大小の土の丘の広がり、所々に露出した煉瓦積みの遺構が目に入る。

初めてここを訪れた時は、期待が大き過ぎたためか、いささか幻滅感を味わった。恐らく大多数の人も同じであろうと思う。バビロンの栄華と滅亡の歴史は、ここを訪れる程の人なら誰でも知っている筈であるのに、これはどうしたわけであらうか。思うに、この遺跡には前に述べた数々の遺跡と異なり、想像の翼を拡げさせるモニュメントが無いのである。イラク政府はバベルの塔の再建計画を持っていると聞いたが、是非実現してもらいたいものである。

バビロンの歴史は古く、前24世紀ごろのシュメールの文書に“神の門”という名で現われ、これがアッカド語でバービルと訳され（今のアラビア語も同じ）さらにギリシャ語でバビロンとなったのである。バベルの塔はバービルの塔のなまったものであることは言うまでもない。バビロンが土の中から再び姿を現わしたのは、1899年から18年間にわたるドイツ・オリエント学会の手による発掘調査によるもので、今、目にすることが出来る遺構は、空前の栄華を極めたとされる新バビロニア時代（612—538BC）のものである。図1はこの調査に基づく地図で、多くの本に引用されているが、これは新バビロニア時代のものであって今のものではないことを注意しておきたい。かつて、広く、深く、流れが早いと言われた、市の中心を流れるユーフラテス河は、今では約15km東に流路を変え、その表現通りの姿を見せているが、ここには細い流れの支流が残されているのみである。また、8kmに及ぶ内壁も、それを取巻く堀も形を残してはいない。

さて、最初に立つ場所は昔の行列道路を覆う丘の上でこれを北に進むと、煉瓦の壁と柱の一部が復元された南の宮殿に至り、さらに100m余り進むと、世界の七不思議の一つであった空中庭園の復元された基底部分を見ることが出来

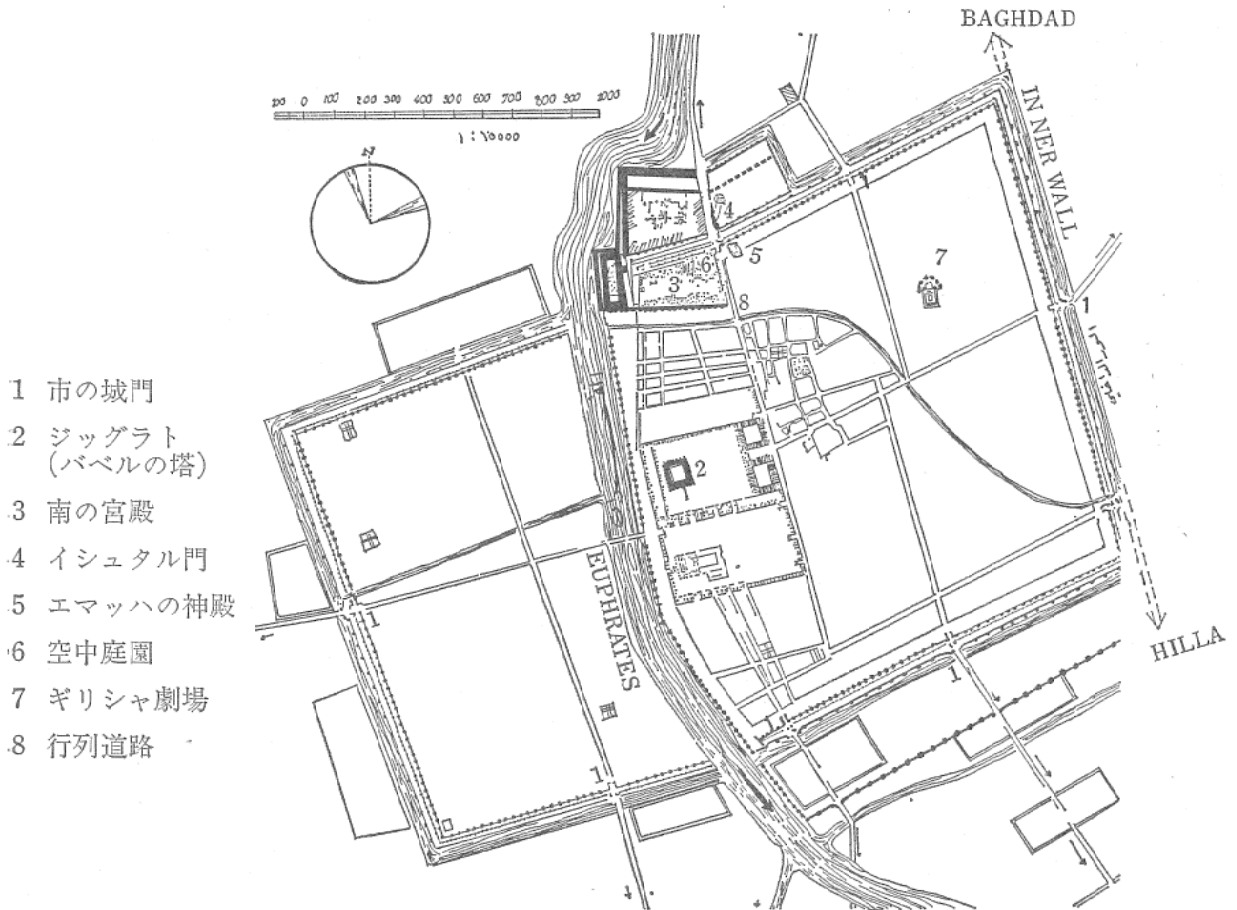


図1 新バビロニア時代のバビロン (ドイツ, オリエント学会の調査による)

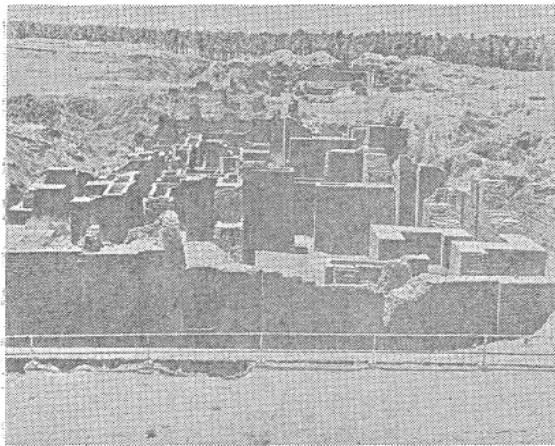


写真5 バビロン, 南の宮殿 前方のナツメ椰子の林の先にユーフラテス支流がある。

る。ここで5 m程階段を下ると牡牛とムシュフーシュ (頭と胴は龍, 前足はライオンの足, 後足はワシの足, 尾は蛇の怪物) の浮彫りのある煉瓦壁で挟まれた巾5~7 m, 長さ40 m位の通路に出る。これがイシュタル門の跡で再び階段を上がると, 両側に煉瓦の壁跡がある巾20 m程

の道路となり, 100 m程で切れて, その向こうはナツメ椰子の林となっている。この道路の西側の丘の上に, 人を組み伏している大きなライオンの彫刻があり, これは古くからバビロンの力の象徴として有名であったものである。

東ベルリンのペルガモン博物館には, バビロンから持ち去った本物のイシュタル門と行列道路の両側を飾ったライオンの壁が展示されて居る。これらが現地のどの部分に当るのかは説明が無いので判らないが, 多分北の入口と, その前の広い道路の両側であろう。写真6にイシュタル門の一部を示すが, 牡牛とムシュフーシュは黄色の上薬がかけられた煉瓦の浮彫で青地に浮き上がっている。門の各コーナーは, 青, 緑青, 黄色に白, 黒の点を連らねた三重の線で縁取りされて居り, アーチの周囲と門の下部, ライオンの壁の上下には16弁の菊花?の紋様を連続させ, 実に見事としか言いようもない。バビロンを訪れる前には是非見ておくべきであると

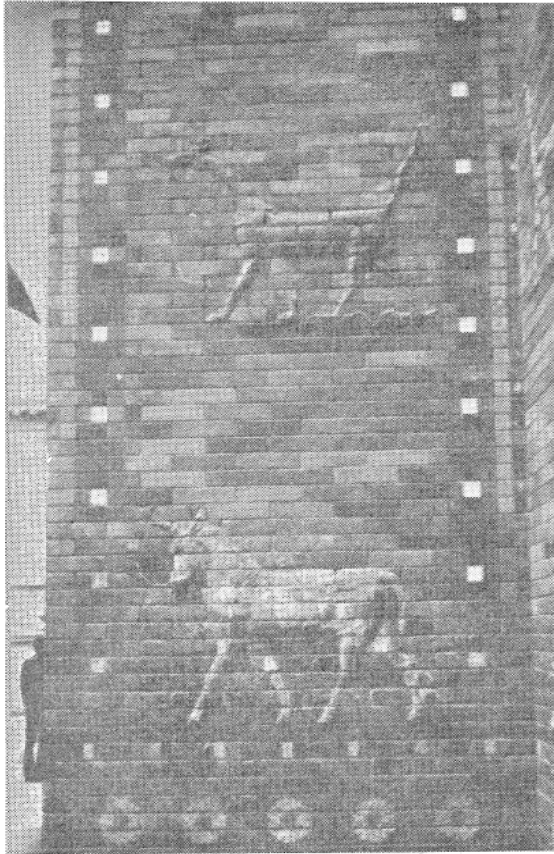


写真6 イシュタル門の一部
(東ベルリン, ペルガモン博物館)



写真7 バスラ, 河岸道路から見た Shett Al-Arab (アラブ河). 市街と港は西岸, 東岸はナツメ椰子の大栽培地. その先に大学がある.

思う。

バベルの塔は今では大きな口の字型の凹地に過ぎず, 予備知識なしでは想像の手掛りすら無い。しかし伝えられる所によれば, 図2に示されているような7階もしくは8階のジグラットで, 底辺は90m角, 高さは90mあり, 最上階は

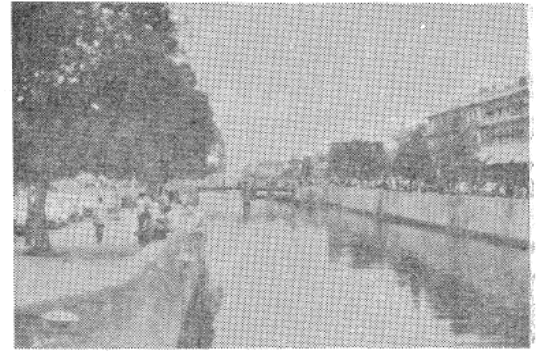


写真8 バスラ市の中心を東西に貫く運河.
(アラブ河との合流点附近から)

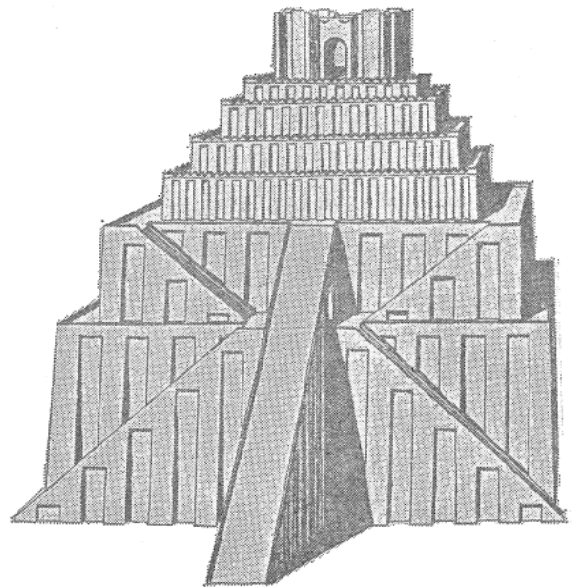


図2 バベルの塔の想像図. 三段目から上は左回りのラセン状になっている。

イシュタル門と同じように青の上葉が掛けられた煉瓦で作られた神殿であったと云う。塔は日干し煉瓦を積み上げて芯とし, その周囲を厚さ15mに及ぶ焼成煉瓦の層で覆ってあったとされている。この巨大な塔も宮殿も, 城壁も跡形も無くなったのは, 外部の良質な煉瓦が2000年にわたり建築資材として持ち去られてしまったからであると云う。

このイラク最大の観光史蹟, バビロンは大勢の観光客を集めて居り, 少なくとも“バビロンを見た”という満足感を与えてくれることは確かである。しかし, 見物を有意義ならしめるには, かなりの予備知識を要するというのが筆者の実感であった。